
夢の装置

blurd

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢の装置

【Nコード】

N2402W

【作者名】

blurd

【あらすじ】

人体実験。人をいけにえにした禁忌、悪魔の所業だ。

ある町の隅に、一つの研究所があった。その研究所には、博士はいたが助手はいなかった。いや、本来はいるはずだった。博士の助手になりたいという人間は町には何人もいたし、その人々は研究所めざして向かって行った。

しかし、研究所に行った人間は、二度と戻ってはこなかった。

「きつとあそこは、人体実験を行っているんだ」

「そうか、助手になりについた人全員が実験で死んでしまったんだ」

「警察に言つて調べてもらおう」

このような会話が幾度となくあり、ついに警察が研究所に足を運んだ。

しかし、そのようなことを行つた形跡は無く、そのまま事件は切り上げられた。

だが、これで納得できる住人ではない。なにしろ何人もの人間が消えた研究所が町にあるのだ。不安がるのはあたりまえだ。

この謎を解明すべく、一人のある少年が町で選抜された。

少年はとても勇ましい心をもっており、さらには百獣の王までも仕留めたことがある、まさに無敵の少年であった。

この少年なら大丈夫だ。きつと研究所の謎を解明することができると。さまざまな期待を胸に寄せ、少年は謎の研究所へと向かった。

町と研究所をつなぐ森を抜けると、ついに研究所が見えてきた。

少年は迷わずドアをノックする。数秒後、ガチャ、という音と共にドアが開いた。

「だれかね君は。私に何のようだね？ 私は忙しいのだが」

中から顔をのぞかせたのは白髪に白ひげの老人だった。少々期限が悪いのか、声が重い。

「私は町からきた者です。博士の助手になりたく、ここまでやって

きました」

「ほう、私の助手になってくれるのかね。なにしろ人手が足りないものでね。これは助かる。それに、先ほどの答えはなかなかおもしろかったぞ。気にいった」

こうして助手になった少年は、研究所の潜入に成功した。しかし、研究所の潜入に成功しても、謎は解明されなかった。研究所の中は人体実験をおこなっている形跡もなく、研究所は平和そのものだ。しかし、真実はまだわからない。少年はまだしばらく居住することにした。

最初の方、少年は博士に対して不信感を抱いていたが、日を重ねるごとに二人の親密感は深くなっていった。なるべく手をつけずにいた博士の実験用具にも手を触れるようになり、実験の手伝いをしていた。

いつしか少年は、本当の助手として、仕事をこなしていた。

当然町からも不安の声があがる。なにせまたあの研究所から人間が消えてしまったのだ。

人体実験の材料にされたと思って当たり前だ。再び振り出しに戻ってしまった。

そんなことなどつゆ知らず、少年は毎日せつせと博士の助手をしていた。

そんなある日、博士は少年に妙なものを見せた。

大きさはバスケットボールのボールぐらいだ。上端は円いが、下は少し四角い。ヒョウタンにも少し似ていた。

「なんですか？ この装置は？」

「これは物体移動機だ。どんなものであろうともどこにでも移動させることができる」

「すごいじゃないですか。なぜ公表しないのですか？」

博士は少しくぐもった声で言った。

「まだ一つしかできてないものでな。それに公表すると何人もの人間がここに押し掛けてくる」

「そうですか……もったいない」

「しかたのないことだ。それより、この装置には触らんでくれよ。壊したとなれば大変だからな」

「はあ……分かりました」

少年はあいまいな返事をする。しかし、心では好奇心でいっぱいだった。

そして次の日の朝。

少年は跡かたも無く消えていた。一つ、少年の机の上にはあの装置が置いてあった。

「やれやれ……やはりまた失敗であったか。物体だけではなく、人間を転送する装置はいつになったら完成するのやら……これである装置の中でさまよっている人間は何人だろうか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2402w/>

夢の装置

2011年10月9日14時19分発行